

センタージャーナル

■発行人／荒山 淳
■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター

〒460-0016
名古屋市中区橋二丁目8番55号
TEL (052)323-3686
FAX (052)332-0900



供舞・迦陵頻を担当する子どもたち

(写真の無断転用はご遠慮ください。)

立つ！
いのちの大地に
聞く！
いのちの叫びを

真実の学びから、
今を生きる「人間」としての
責任を明らかにし、
ともにその使命を生きる者となる。

- 聖典研修 第11・12回 『仏説阿彌陀經』 —その教義と真宗の儀式— ②・③
- 御遠忌直前特別編集
- 研究生報告 演劇に挑戦！劇団BOU'S結成！ ④・⑤
- 大谷派の近現代史 第27回平和展「けされた親鸞聖人」 ⑥・⑦
- 尾張の真宗史 「親鸞聖人と尾張門徒」展によせて ⑧・⑨
- 現代社会と真宗教化 御遠忌と東日本大震災 ⑩・⑪
- INFORMATION ⑫

浄土へ導く鳥「迦陵頻」

名古屋教区・別院の宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要が間もなく厳修される。長年、楽僧として多くの方々にお育ていただいたが、このたびの法要では、供舞「迦陵頻」の指導役を仰せつかった。四歳から十一歳の子たち十一人と、一月から毎週一度の習礼を重ね、いよいよ本番間近となってきた。

習礼の始まりと終わりには、必ず阿彌陀様に合掌し、念仏を称えるようにし、時と場をともにするため「心を一つにし、心を込めて仏様にお供えをしましょう」と声をかける。そして習礼が始まるのだが、型の如く舞えたとき、その様子を見守るお父さん・お母さん、祖父母をちらっと見て微笑むその表情に、私も嬉しくなる。ご参拝される皆さんにも、可愛らしくもあり、頼もしくもある彼らの華やかなる舞を是非見守っていたきたい。

迦陵頻とは、『阿彌陀經』にその名を連ねる浄土に飛来する人頭鳥身の鳥である。昼夜にそれぞれ三度ずつ優しく美しい音で啼く。その音を聞き已ったこの土の住人は、皆悉く仏を念じ、法を念じ、僧を念ずるといふのだが、舞人が鳴らす銅拍子の突く音が迦陵頻の囀として表現されている。そして、この鳥の啼く彼の仏の国土には地獄・餓鬼・畜生の悪しき境界である三悪趣は存在しないと説かれている。

憶えば五年前、東日本大震災が起り、真宗本廟で供わる附楽と供舞は儂く消えた。絶えず非情ともいえる事態が繰り返され、人として生まれた喜びを見つけることもできぬまま一生を終らせるのであれば、ただ無限に拡がり続ける墓場となろう。三悪趣を生き、その墓場への歩みを続けるしかない私に、私は共に同心を持つて生きることのできる、すぐれたはたらきである浄土の徳が成就した世界である仏の国土に生まれよと願っていただく。

舞楽は、単なる賑やかしではない。いま、ここに、雅楽が奏でられ、舞が供わるといふ事実そのものが、あらゆる衆生にむかって彼の仏の国土に生まれよという弥陀の喚び声であったのである。

子たちが手に持つ銅拍子の突く音は、迦陵頻という鳥の声の単なる真似ごとではない。莊嚴として「供舞」となっているのが重要なのである。それは、「心を一つにし、心を込めて仏様にお供えをしましょう」と口にする、供える者としての私への厳しい問いである。型の如く口にしてはおらぬか。目睫の間に控えた御遠忌法要に憶うことである。

(主幹 荒山 淳)

聖典研修

『仏説阿弥陀経』—その教義と真宗の儀式—

第十一回 二〇一五年十月二十九日(木)

『阿弥陀経』に説かれる「浄土」

講師 廣瀬 惺氏 (同朋大学特任教授)



浄土はどういう世界か？

今回から「正宗分」に入らせていただきます。正宗分には、大きく二つの内容が説かれています。一つは「極楽(浄土)を讃嘆する」ということ。もう一つは浄土へ往生する行として「念仏を勧める」ということです。

「極楽を讃嘆する」一段についてお話しをさせていただく前に、「浄土とはどういう世界か？」を確認しておきたいと思えます。「浄土」はどこかにある世界だという了解も存在します。七高僧の伝統以外では、死後に行く世界としての実体的な浄土観が圧倒的だと思います。それに対して、七高僧から親鸞に至るまでの流れの中で、どのように浄土が了解されてきたのか。

この事については、まず、親鸞聖人は『教行信証』の「証卷」と「真仏土卷」に善導大師の文を引かれて、
西方寂靜無為の樂には、畢竟逍遙して、
有無を離れたり。(『聖典』二八三頁)

と述べておられます。浄土は実体を離れた世界だということです。「逍遙」とは掴めないとし上げてよりよいでしょう。対象化して捉えられる世界ではないということです。そして親鸞聖人は、対象化された浄土を方便化土として明確に教えてください。ださっています。

それでは、浄土はどういう世界なのか。「真仏土卷」をご覧ください。

謹んで真仏土を案ずれば、仏はずな
わちこれ不可思議光如来なり、土は
またこれ無量光明土なり。しかれば
すなわち大悲の誓願に酬報するがゆ
えに、真の報仏土と曰うなり。

(『聖典』三〇〇頁)

とございます。浄土は大悲の誓願に酬報して開かれる世界(生活)だとおっしゃっています。大悲の誓願は、私たちの上には「念仏の心」として形を取ってくるわけでしょう。そういう意味で、浄土とは南無阿弥陀仏が開いてくださる世界(生活)、念仏申される心に自ずから開かれ続けていく世界(生活)だと言えます。一

言つけ加えますなら、「無量光明土」という表現は、直接には世界(涅槃界)開かれた一如の世界)を意味していますが、さらにその徳をもった生活をも包んで言われているものといえられます。

『阿弥陀経』に「極楽」が説かれている意とは？

ところで『阿弥陀経』では、浄土が世界というよりも、本願に生きる人の上に開かれる生活として直接には説かれています。と言うことは、生活に即する形で、無量光明土すなわち光の世界としての浄土が自ずからに現されているということです。

そして、『阿弥陀経』に説かれている浄土の意味ですが、これまで申し上げてきましたように、『阿弥陀経』は、私たちが本願に立ち返らせ続けてくださる經典です。そのことから申しますなら、『阿弥陀経』に説かれている浄土は、特に、私たちに先立って念仏に生きていかれた方々(また生きておられる方々)が表して下さっている世界であり生活であると、申しているのではないのでしょうか。

『阿弥陀経』に説かれる教説が、先んじてお念仏に生きてくださった(くださっている)方々と重ならないなら、教説を通して浄土を願うということは困難だと思えます。『阿弥陀経』の浄土莊嚴を讀んだとしても、「美しい世界が説かれているなあ」という感想で止まるのではないのでしょうか。

經典をいただくことによって様々な感

情が呼び起こされるのは当然ですし、大事なことです。しかし、極楽として説かれている教説と、私たちに先んじて念仏に生きてくださった方々が表わして下さっている世界・生活とが重なっていただかれることにおいて、初めて、その教説が「浄土願生の心と呼び起こす教説」としていただけるのではないのでしょうか。そういう意味で、浄土莊嚴の教説は、念仏に生きた人々との出あいを抜きにいただくことはできないと言えます。

「浄土への思い」を起こさせるもの

『阿弥陀経』に説かれている浄土は、先んじて本願念仏に生きてくださった方々の上に表されている世界・生活としての浄土です。

具体的に申しますなら、親鸞聖人や蓮如上人の上に私たちが感じ、いただかれる世界・生活。さらには、念仏に生きていかれたご門徒さんや身近な方々等々。そういった方々の姿と教説とが重なるところに、『阿弥陀経』の教説が、私たちに浄土願生の心を起こさせる教説になるわけでしょう。

そしてまた逆に、『阿弥陀経』に莊嚴として説かれていることによって、念仏に生きられた方々の生涯が浄土の徳を表してくださっているご生涯としていただかれてくるわけでしょう。その意味で、極楽浄土の教説と念仏に生きていかれた方々との間には、相互関係があると申し上げることができるかと思われま

第十二回 二〇一五年十一月十三日(金)

称名念仏の背景

講師 竹橋 太氏 (儀式指導研究所研究員)



念仏は「称名」だけではない

私たちは「念仏」といえば、「称名念仏」のことだと考えます。今日は、インド仏教における念仏などをふまえて、考えてみたいと思います。

お釈迦さまの滅後、先に經典が、その後には念仏などがつくられていきます。人々はそれらを読んだり拝んだりする中で、そこに表現された念仏を思い描き、法に触れようとしました。これらのことを今では「観仏三昧」といいます。そしてこれは「念仏」の一つの形なのです。

「念仏」の「念」はインドの言葉でも、漢字の意味でも、「思い出す、思い起こす」ということと、「忘れずに思い続ける、記憶する」という意味があります。だから念仏とは「出あった念を忘れないように思い続ける」ということと「念を思い出す」という意味があります。それはまさに三昧(精神集中して一つの対象に思いをかける)ということになります。ですから念仏は本来、三昧なのです。

では、「称名」はどうでしょうか。実は名前を称えるということも、念仏三昧の一部だったのです。念のことを思うのに、

座って瞑想しながらということですが、口に出して称えるということがその入り口にありました。

ただ、「南無阿弥陀仏」というように念の名を口に称えるということが実際にいつの時代に始まったかということは、はっきりとは言えません。インドの文獻に「南無阿弥陀仏」という表現が見当たらないからです。これは私の考えですが、あまりにも当たり前だから残っていないのかなと思っっています。

例えば、口に「南無仏」と称えることは、インドの文獻によく出てきます。三帰依文は口に称えるものですが、その中に「南無帰依仏 南無帰依法 南無帰依僧」という表現が見られます。他にも、「南無仏陀」という表現は多く見られます。

また念仏の名前ということについては、インドで作られた『仏名経』という經典があります。この中に、未来・過去・現在の仏や、東西南北などにいらっしやるたくさんのおののの名が出てきます。この經典中に出てくる念仏の名の前には「南無」が付いていませんが、「南無」を含めた上で念の名が挙げられていると考えた方がよいでしょう。

正しい念仏？ 間違った念仏？

このようなことを言いますと、「では称名念仏はダメなのか？」という疑問が出てくるかもしれません。実際、称名念仏は未熟な修行者たちがするべき劣った行だという批判があります。「観相などを捨て、念の名前を呼ぶだけで救われるわけがない」ということで、議論もされています。

しかし私は、称名念仏はダメだということのような善悪を判断するためにインドの念仏をお話ししたわけではありません。その逆も同様です。称名念仏は他力だからよくて、観仏(念仏)三昧は自力だからダメだ、ということでもありません。

『南無阿弥陀仏』だけでどうして救われるんだ」ということの背景に、今言ったような念仏のことを思う、その世界を思い忘れないでずっと持つという流れがあるのです。そのことをふまえた上で、浄土教の祖師たちはその流れを称名念仏に定めていったということです。

それまでの念仏が自力だったから、それとは異なる称名念仏を作ったということではありません。自力の念仏でも最終的に結果として他力だったと気付いています。それが縁起を説く仏教の当然の帰結です。「自分」は与えられたものだと思いが下がる所に落ち着いていく。そういう身をを持った上で、「なぜ称名念仏だけで救

われると言わなければならなかったのか」ということを考えていく必要性があると思えます。

観仏三昧はダメなのか？

浄土真宗の一つの考え方として、「観仏」と「見仏」として違いを考えることがあります。「観」と「見」の違いは聴・聞と同じです。「聴」とは聞く、「聞」は聞こえてくること。「観」は見ることで自力、「見」は現れてくることで他力という理解です。しかし観仏三昧においても私が仏を見るのではなく、仏が向こうから現れてくださる。つまり結果は他力だということになります。

念仏(観仏)三昧というのは、仏が現れて下さるくらいに私たちは念仏のことを思いなさい、ということでしょう。なぜなら、念仏は「法」だからです。法(真実)というものは、向こうから姿を現すから法と言うのです。私たちが作るものではないからです。そういう形で法と出会うために、念仏三昧が説かれたのだと思います。そしてその観仏も称名も結果が同じ所にあるからこそ、他力の表現である称名念仏が、より精密な仏道を表わすものとして明らかにされていったのだと思います。本願他力をいただいた立場から念仏を組み立てていった必然的な帰結ということになるのではないのでしょうか。

研究生報告

御遠忌へ向けての研究生の取り組み

演劇に挑戦！劇団BOU'S結成！

— 互いを認め、ともに学び、ともに歩む —

御遠忌期間中の四月二十九日（金）、親鸞聖人と恵信尼の結婚を題材にした演劇が企画されているのを「存知ですか？ 演じるのは教化センター研究生や修了生が中心の「劇団BOU'S」。残すところ一か月を切り、本番へ向けて日々稽古を重ねています。

今回は、研究生の指導にあたっている教化推進要員より、このたびの企画の経緯と願いについて報告します。

【御遠忌に主体的に関わりたい】

研究生カリキュラムの一環として取り組んでいる「真宗門徒講座」。この講座は、真宗門徒の暮らしと「つとめ」をテーマとして名古屋別院が主催し、企画運営は研究生が中心となり行っている。今年度は御遠忌お持ち受け事業と位置づけ、「書いて味わう正信偈」と題し開講してきた。

講座では、まず荒山主幹による正信偈の講義を聞き、正信偈を書写し、研究生の進行のもと座談を行う。全十一回の講座が終了した時には、自分が書写した勤行本が出来上がり、その手づくりの勤行本を持参して御遠忌法要にお参りしよう！という企画を立てた。

しかし、それだけでは何か物足りない気がし、「もっと研究生が主体的に、なおかつ、一年間共に学んできた受講者」と



稽古は発声練習から始まる

もに、「御遠忌法要をお迎えしたい」という思いが、このたびの演劇企画への挑戦のはじまりである。

【演劇に込めた願い】

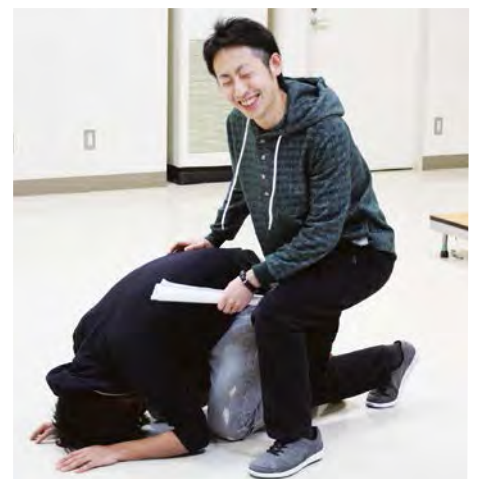
演劇のテーマを発案した堂宮研究生は、友人の結婚披露宴に出席した際、親族や友人、職場の同僚など、様々な人たちが新郎新婦を祝福する姿を見て、私たちを成り立たせている縁ある人たちとのつながりに感動した。しかしその一方で人間関係を切り捨てていくような私たちの在り方を見つめなおしていきたいと思ったそうだ。

その思いから「親鸞と恵信尼の結婚披露宴」をテーマに演劇をするという企画が提案され、演劇経験者である藤原研究生が台本をつくり、演劇初体験の研究生たちが話し合い、修正を重ね、立ち稽古に励んできた。

【演劇後の同朋会】

演劇の後は、劇を通して感じたこと、家族のあり方、御遠忌テーマなどについて、食事を交えながら演劇出演者と参加者が語りあう同朋会を「二次会パーティー—飲んで、食べて、語らって」と題して企画している。

「同朋会」「座談会」と聞くと、何か難しいことを言わなければならないと敬遠されてしまいがちだが、演劇というツールを通して、また食事を交えることで、互いに語り合うことの楽しさ、大切さを感じるきっかけになればと願う。



【門徒講座の受講者で御遠忌団参】

門徒講座の受講者に演劇の宣伝をしたところ、「演劇はもちろんのこと、是非このメンバーで法要にもお参りしたい」との要望が出され、門徒講座の受講者による団体参拝が企画されることとなった。

このような声がかかる背景には、研究生が作り上げてきた受講者との関係がうかがえる。本番では、演劇の出来栄もさることながら、観客との関係にも注目していきたい。

【研究生の姿を見て】

演劇「親鸞・恵信尼結婚披露宴」を成功させるため、週に何度も集まっている。最初は、研究生一人一人がどう動いていいか分からず、進展が見られないこともあったが、今では台本の見直しに積極的に参加し、担当を自分たちで決め、そ



「劇団BOU'S」劇団員

上段左より：水野 拓磨、寺西 修司、加藤 博証、石原 唯和、鍋野 了悟、田島 晶、小塚 順
 下段左より：加藤 浄恵、玉腰 暁広、藤原 猶誠、堂宮 淳賢、荒山 優、本多 摩耶、菱川 俊
 荒山 淳、飯田 真宏、林 博行、二村 和敬、安部 淳、小嶋 朋大、花園 盛二、荒山 華枝

みなさまのご来場をお待ちしています！

れぞれが責任を持って動いている。時には声を荒げ、言い争いになることもあるが、それは真剣に関わっていることの証だろう。

互いを認め、ともに学び、ともに歩ん

でいこうとしている彼らの姿はとても頼もしく見える。

研究生たちによる演劇「親鸞・恵信尼結婚披露宴」、是非見にきてください。

(教化推進要員 加藤浄恵)

演劇「親鸞・恵信尼 結婚披露宴」 The Shinran wedding

— 七五〇年の時を超えて —

2016年4月29日(金・祝) 東別院ホール(東別院会館3階)

- ① 演劇「親鸞・恵信尼 結婚披露宴」入場無料(要整理券)・定員400名
開場16:00/開演16:30(終了17:30)
- ② 二次会パーティー「飲んで、食べて、語らって」

※二次会の整理券は完売いたしました。

申込み・問い合わせ

御遠忌「行事部」

TEL: 052-331-9578

FAX: 052-331-9579



親鸞役
荒山 優
(第9期研究生)

「親鸞聖人を演じる」という、平常まず考えられない機会をいただきました。ましてや、資料的にも乏しい「結婚」というテーマに、皆で悪戦苦闘する毎日です。

親鸞、恵信尼という人物を知るには、お二人が出会われた人々、世界を知ることが大きなきっかけになるように思います。

より良い形で皆様にお見せできるよう、スタッフ一同精進してまいります。



脚本
藤原 猶誠
(第9期研究生)

親鸞・恵信尼結婚披露宴をやりたいたい？現実味のない企画なのに、やってみたいことや提案がどんどん出てくる。そんな思いからこの芝居が出来上がりつつあります。

メンバーのほとんどが初めての舞台。発声練習から始め、稽古に稽古を重ねてきました。

上演まで残り1か月！お楽しみに！
(間に合うかなあ……?)



劇団BOU'S代表
堂宮 淳賢
(第9期研究生)

もし、親鸞聖人が現代に生きておられたら、結婚披露宴にはどんな仲間が集い、どのように祝福したでしょうか。「親鸞聖人の結婚」という課題を通して「ともに生きる」ことの意味を確かめます。

教化センター研究生を中心とした若手僧侶劇団「劇団BOU'S」が親鸞聖人へのあふれる思いを込めて熱演します。ご期待ください！

の史
大谷派
近現代

第27回平和展

「けされた親鸞聖人」

*はじめに

今年度の「平和展」は、名古屋教区・名古屋別院 宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要の記念行事「東別院広場」のひとつとして開催します。

テーマは、「けされた親鸞聖人」。宗祖の御遠忌にふさわしくないと感じる方もおられるかもしれませんが、そこには「平和展」を通じて伝えたいと考える課題があるのです。例えば、どうして葬儀をするのだろうか？という疑問に真宗門徒として応えるならば、亡き人の死を機縁として真実の教えに出会い、ひらかれて行く歩みにあります。御遠忌の意味もまさにそこにあり、親鸞聖人と直接的な関係だけにとどまらず、仏法に生きるのです。歩みをあらたに始めるこの機縁にあたって、戦争遂行に不都合な親鸞聖人のみ教えが「けされ」てしまった事実を見つめなおすことの重要性を問い直したいと考えていたのです。

*何を「けした」の？

では、親鸞聖人の何を「けした」のでしょうか。その象徴的な出来事が「聖典削除」です。「聖典」とは、親鸞聖人が大切にされた経典や、書き残された『教行信証』などの著作等、一連の経文類を指します。この中から、親鸞聖人の行実が

記された『御伝鈔』の「主上臣下、背レ法違レ義、成レ忿結レ怨」といった、時の体制にそぐわないと見做した文言を不拝読にする行為のことです。大谷派は一八七三（明治六）年二月、『御伝鈔』と『御文』の一部分を読誦禁止としました。これは、翌年四月に取り消されます。明治維新直後の混乱期を背景とする出来事でしたが、同じようにもう一度、「聖典削除」が行われます。一九三六（昭和十一）年十月に『御伝鈔』の拝読禁止が口達されたのです。

*進んで戦争加担

この「聖典削除」は戦争協力の一環でしょうか？それとも「戦時教学」のあり方でしょうか？それは、国家によって無理矢理やらされたことでしょうか？

これまでの「平和展」から見えてくるのは、少なくとも無理矢理やらされた、教団存続のための行為ではないということです。なぜなら、同じみ教えをよりどころとする高田派などの真宗教団が削除を見送っていることが分かっているからです。他派に先駆けた行動だったと言えます。

教育的な戦争協力は「戦時教学」と呼ばれています。これはアジア太平洋戦争（一九四一（昭和十六）年十二月八日）の時に構築されたわけではありません。日清戦争の際にすでに戦争を可とする教学

を打ち出しています。その教学を社会的に実践しており、日露戦争を経て、「満洲事変」（一九三一（昭和六）年九月十八日）に始まる十五年戦争期（一九四五（昭和二十）年八月十五日）に「戦時教学」は最盛期を迎えました。そして、天皇の政道を中心とする「皇道真宗」の名乗りへとエスカレートして行きました。

*英霊顕彰

「満洲事変」によって占領地が拡大するとともに大谷派の活動地域も拡がりました。上海別院など主要な別院には、戦死者の遺骨が集められ法要が勤まりました。遺骨となって帰国した軍人は「英霊」として供養されました。本山東本願寺では一九三二（昭和七）年三月二十日に「日支事変殉国戦病死者追弔大法要」を厳修しました。伊勢神宮祭主を務めた久邇宮多嘉王など来賓約三百人、遺族参拝七百人以上が参列する中、飛行機から追弔ビラを配布し、大谷中学、大谷女学校、日曜学校生徒ら約千人が「弔」字型に整列するなど、大法要の名にふさわしく盛大

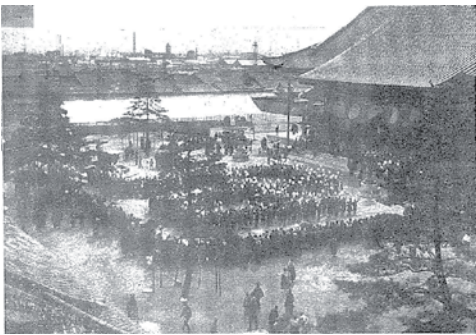
に執り行いました。

真宗大谷派は一九三八（昭和十三）年ごろから「英霊」の収骨と位牌を安置し、功績を讃える施設「忠霊殿」を東本願寺内に設置することを計画しました。「英霊」とは、戦死者などの「霊」を敬った言葉です。国家の為に死んだことから、一般的な死よりも上位に置かれており、靖国神社に祭られる対象（祭神）にもなりました。「忠霊殿」は、宗議会で「霊」という概念について疑問が出されたことから「表忠殿」へと名称変更され、阿弥陀堂の南側に設置する予定でした。しかし、戦況悪化による物資不足を背景にして、完成することはありませんでした。

ただし、「英霊」を収骨する動きそのものは竣工に先立って開始されていました。「英霊」への追悼と感謝は本山を中心として全国各地で行われ、戦死者家族を慰問しました。

*国家に奉仕する大谷派

こうした大谷派の活動は、国家への奉公でもありました。日中戦争（一九三七（昭和十二）年七月七日）〜一九四五年八月十五日）が始まると、第一次近衛内閣は一九三七（昭



大谷中学、大谷女学校、皆山、稚松両小学校生徒及幼稚園、日曜学校生徒等約一千名の『弔』字型整列（本堂前白砂）
『真宗』1932（昭和7）年3月号



表忠殿の設計図
『真宗』1940（昭和15）年1月号

和十二)年九月から国民精神総動員の政
策を打ち出しました。大谷派はこれに
応え、一九三四(昭和九)年度以後の布教
目標「同信報国」を基に、「同信報国運動」
を展開。「今や帝国が折伏の利剣を執って
起てるのは、固より平和建設の方便なり
断じて支那民衆を憎悪する報復に非ず」
と、中国人を殺害することは折伏である
と、仏説と結びつけて肯定しました。



戦死者に読経する従軍僧侶
『東本願寺 上海開教六十年史』上海別院発行
1937(昭和12)年8月20日

* 皇道真宗の名のり

一九四二(昭和十七)年十二月に入
ると、本山東本願寺の山門前に「皇威宣揚
(天皇の力をはつきりと示す)・挺身殉
国(自ら進み出て国のために命を投げ出
す)・生死超脱(生や死にとらわれな
い)の看板をかかげて、戦争布教を活動
の中心に据えました。一九四三(昭和十
八)年三月に行われた宗議会は「決戦宗
議会」と銘打たれ、「皇道真宗」という戦
争の主体的立場のスローガンが並びまし
た。大谷派の運営は「決戦」が主であり、
同時に、大谷派が浄土の真実を求める浄
土真宗から、「皇道真宗」へと変節したこ

とを公式に表明したのです。そして、戦
争を肯定する戦争布教を確実なものとし
て、戦艦を国に献納しようとする「建艦
翼賛運動」など社会的実践がますます盛
んになって行きました。

* 国家の要請と大谷派 「建艦翼賛運動」の開始

一九四二(昭和十七)年十一月二十六
日、文部大臣は各宗教団体の代表を一堂
に集め、より一層の戦争協力を要請しま
した。軍用機(戦闘機)の献納を申し出
る宗派が多くを占める中で、大谷派はよ
り高額の軍艦の献納を申し出たようです。
「建艦翼賛運動」は、同年十二月一日に発
表され、数か月で百万円(現在の貨幣価
値でおよそ三十億円)を集め、一九四三
(昭和十八)年五月三十一日に海軍のもと
に手渡されました。続けて行われた第二
次運動では、これまでの「二倍三倍の成
績」を目標としました。この運動への動
機付けは、「朝家の御ため国民のために、
念仏をもうしあわす」という親鸞聖人の
み教えの一部分を切り取ったものであり、

『真宗』1943(昭和18)年7月号



中国で戦死した門徒の葬儀の写真



表忠殿の遺骨袋と申請書

* 二枚舌の平和論

「皇道真宗の面目」と喧伝されました。
こうした大谷派教団の活動は、敗戦ま
で継続されました。この間、まぎれもなく
平和への願いは、「けされ」ていたのです。
おおむね、以上の様な流れを取り上げ
る「第二十七回平和展」は、過去を取扱
いますが、今を生きる私たちを課題にし
ています。そもそも二十七年間にわたる
「平和展」の営みに貫かれてきた課題は、

* 寄贈資料を生かす

平和への願いにあります。しかし、常日
頃から親鸞聖人を讃嘆し、平和や人権の
大切さを口にしていたとしても、「その場」
になつたら口を噤んでしまいたくなること
もあるかもしれません。集団的自衛権の行
使容認や特定秘密保護法の制定、そして憲
法改正の動きにあっても、平和を願う声
を途絶えさせないようにしたいものです。
最後に付記しておかなくてはならない
のは、先にも触れました「忠霊殿」への
納骨申請用紙などの原資料の存在です。
この資料は、昨年、門徒より寄贈されま
した。一人の若者が出征し、中国で戦死
し、葬儀を終えた後に靖国神社へ合祀さ
れるまでの一連の遺品です。寄贈者に感
謝を申し上げると共に、これまで「平和
展」を通じて寄贈されてきた数多くの資
料が平和な社会につながる一助となるこ
とこそが、伝道活動の意味であると考え
ています。(研究員 新野和暢)

第27回 平和展

(御遠忌記念行事「東別院広場」内)

「けされた親鸞聖人」

日時：4月22日(金)～4月24日(日)
4月26日(火)～5月1日(日)
10時～17時(5月1日は14時30分まで)

会場：東別院会館2階
「蓮・橘・東側ロビー」

尾張の真宗史

「親鸞聖人と尾張門徒」展によせて
— 稲沢市・浄福寺蔵の方便法身尊像についての考察 —

来る四月二十二日から五月一日にわたる御遠忌法要の期間中、記念行事「親鸞聖人と尾張門徒—その信仰のすがた—」展が開催され、主に尾張地域に伝わる浄土真宗の法宝物史料が展示される。その中には、名古屋教区教化センター・旧蓮如上人研究室編集の、『名古屋教区教化センター研究報告 第四集 蓮如上人と尾張』（以下『蓮如上人と尾張』）では紹介されなかったものが何点か含まれており、すでにセンタージャーナル九四号で報告した半田市成岩本町・無量壽寺所蔵の法宝物四点もそれにあたる。本稿では引き続き、展示会の実行委員として稲沢市氷室町・浄福寺に所蔵される方便法身尊像を紹介し、展示会の案内としたい。

一 聖徳太子影像

稲沢市史編纂委員会編『真宗寺院什物調査報告書』（昭和六〇年、稲沢市教育委員会）によれば、もともと中世の氷室村には寺院が五か寺あったが、木曾川氾濫のために全て他へ移転した。そこで、せめて村内に一か寺はとのことで、桜井家（浄福寺住職家）の祖先が建立したのが浄福寺の始まりであるという。釈慶信を開基とし、その慶信は天正九（一五八一）年没ということなので、開創は一六世紀中頃ということになる註1。



① 聖徳太子影像（絹本着色）縦九〇・〇cm×横三二・四cm
*『蓮如上人と尾張』三六頁に掲載。

ただ同寺には、写真①の聖徳太子影像（「親鸞聖人と尾張門徒」展出陳予定）が伝わっており、これは柄香炉をもって正面向きに立つ孝養太子像で、初期真宗の法宝物によく見られる太子像である。画絹の状態からも一四世紀後半のものと考えられ、初期真宗が聖徳太子信仰と密接な関係にあったことを考え合わせると、おそらく浄福寺開創に先立ち、この地にあった太子堂をもととするような真宗道場が存在し、そこに奉掛されていたものが浄福寺に受け継がれたと推測されよう註2。

二 方便法身尊像

次に、本稿の主目的である「親鸞聖人と尾張門徒」展出陳予定の同寺所蔵の方便法身尊像を紹介・考察したい註3。写真②に有るように、青蓮華の蓮台に両足をそろえて正面向きに立ち、右手は胸前に上げ、

左手は垂れ下げて、ともに親指と人差し指を合わせる撰取不捨印（来迎印）を結んだ阿弥陀如来単身の立像で、仏身は金色、頭光からは四十八条の光明が上下左右に放たれている。仏身高（頭頂部から爪先まで）二九・二cmと小振りだが、蓮如上人継職以降、本願寺末の寺院・道場に本尊として下付された阿弥陀如来絵像の様式である。蓮如上人以降の本願寺住持はこの様式の阿弥陀如来絵像に裏書を施し、「方便法身尊像」あるいは「方便法身尊形」という名で盛んに下付した。裏書は蓮如上人以降ほぼ定型化しており、上段中央に下付法宝物の名称、下段に右から住持の署判（署名・花押）、下付年月日、手次関係、宛所、願主名が記された。

ただ、残念ながらこの方便法身尊像には裏書が伝わっており、正確な下付年代は特定できない。しかし、四十八条の光明のうち、阿弥陀如来像の頭上から真上に放たれる光明一条と、蓮台の中央から真下に放たれる光明一条のあることが注目される。実は、吉田一彦・脊古真哉・小島恵昭氏の詳細な調査研究により、本願寺下付の方便法身尊像の光明は、文明一六（一四八四）年前半を画期として、真上、真下に放たれる様式から、光輪上方は中央からV字型に、蓮台下方は同じく中央から八字型

に放たれる様式に変化することが明らかとなっている註4。それに従えば、この方便法身尊像は文明一五年以前に受けたものとすることができよう。さらに、裏面に貼付されている料紙（写真③）にも注目される。左端にある墨痕が「釋□□（花押）」と判読できるのである。『真宗寺院什物調査報告書』ではこれを教如上人の署判と推測しているが、むしろ次に見るように順如上人のものであるのではないかと考えられる。これも註4『蓮如方便法身尊像の研究』によつてであるが、従来は知られていなかった

② 方便法身尊像（絹本着色）縦五三・八cm×横二四・三cm

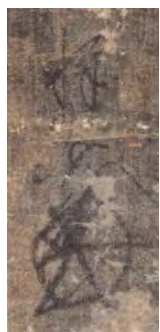


③ 同 裏面貼紙（紙本墨書）縦二三・八cm×横一六・八cm



「
」
「
」
文「
」
「
」
「
」
釋□□（花押）

A 順如上人署判（滋賀県長浜市・安明寺蔵 方便法身尊像裏書）



*註4『蓮如方便法身尊像の研究』二二頁より転載。

順如上人裏書の方便法身尊像が存在することが明らかとなっており、そこにある署判も紹介されている。そのうち比較的きれいに残っているのが滋賀県長浜市・安明寺(本願寺派)の裏書で、写真Aがそれである。写真③の裏面料紙にある署判は剥落が著しく比較が難しいが、花押の輪郭などは近似しているようにも見え、表面が文明一五年以前と見られることから、これを順如上人署判とすることは可能と思われるのである。

順如上人は現在、本願寺の歴代に数えられていないので、あまり広く知られていないが、蓮如上人の長男として嘉吉二(一四四二)年に生まれ、文明一五(一四八三)年五月、山科本願寺の完成を目前にして亡くなった。その後半生は、寛正の法難「寛正六(一四六五)年」で破却された本願寺復興にささげられたといっても過言ではなかったが、これも吉田氏らの研究によって、文明二(一四七〇)年の一月八日から二月二七日の間に本願寺住持を継職し、亡くなるまでその職にあったことが明らかとされている^{註5}。そして、順如上人の死後、再び蓮如上人が復職し、方便法身尊像の光明様式が前述のように変更されたというのである^{註6}。それを踏まえてここで、この順如上人署判の入った料紙は何か、という問題を検討してみよう。前述の本願寺下付物の裏書とは形態を異にしており、通常の裏書とは考えにくい。しかし、註5の吉田氏論文で紹介されている順如上人発給の法名下付状^{註7}とこの料紙を比較すると、文書の形式が似通っており、そこからこの料紙を順如上人発給の法名下付状と推測してみたい。つまり、順如上人発給の法

名下付状を、同じく順如上人下付の方便法身尊像に貼り付けたと考えるのである。もともと、表装の修復をする際に表面と裏書が錯綜することもあるので注意が必要だが、現時点ではこのように考えてみたい。

よって、この方便法身尊像はおそらく、一章で述べた浄福寺開創に先立ってこの地に存在した真宗道場の本尊として、順如上人の本願寺住持就任期に授与され、その後浄福寺へ受け継がれたと推測されるのである。

三 教区内の順如上人関係の法宝物

最後に、名古屋教区内に伝わる順如上人下付と考えられる法宝物二点を参考として紹介しておきたい。ただし、この二点はすでに『蓮如上人と尾張』(四一頁・一三四頁)に掲載され、平成一二(二〇〇〇)年の名古屋別院 蓮如上人五百回御遠忌法要時の蓮如上人展でも出陳されているので、重複することを断わりしておく。まず一点目は、一宮市・蓮光寺に伝わる方便法身尊像(写真④)である。これは旧蓮如上人研究班によって、名古屋教区内で始めて確認された順如上人下付と考えられる方便法身尊像であり^{註8}、センタージャーナル三六号に井川芳治氏の詳細なレポートがある。残念ながら裏書が伝わっていないが、表面の真上と真下に放たれる光明の形状から文明一五年以前のものと思受けられる。『起町史 下巻』三五四

頁(昭和三〇年、尾西市役所)に同寺の宝物として紹介される「文明九年裏書阿弥陀如来画像」に当たると思われ、前述のように文明九年は順如上人の本願寺住持就任期である。そのことから、この方便法身尊像は順如上人下付の可能性が極めて高い。

もう一点は写真⑤の墨書六字名号である。青木馨氏を中心とした同朋大学仏教文化研究所による、蓮如上人から教如上人までの本願寺住持下付の名号研究から、この筆跡の墨書六字名号が順如上人筆であることは間違いのないことであろう^{註9}。東区・法善寺に伝わるこの名号は比較的大振りであり、順如上人を歴史的に正しく評価する上で看過できない重要な法宝物である。「親鸞聖人と尾張門徒」展でも再び出陳されることになっている。(研究員 小島 智)

④方便法身尊像 (絹本着色)
一幅 縦八九・三cm×横三五・五cm (一宮市・蓮光寺蔵)



⑤順如上人筆六字名号 (紙本墨書)
一幅 縦九五・〇cm×横二七・九cm (東区・法善寺蔵)



1 実際に寺号を名乗るのは江戸期で、この時点では前身の道場であったと思われる。

2 ちなみに、この画像には外箱があるようで、『真宗寺院什物調査報告書』(七七頁)にはその箱書記録が記されている。我々が調査した際にはこの箱書を実見できなかったが、貴重な記録であるのでここで引用しておきたい。
銘「聖徳太子御真筆」一福^{註10}。

3 「聖徳太子自画右之方之自童子者、太子誕生之像、左之惣髮茂太子也、放光明緋之衣僧形者南岳太子之像也、太子者南岳之垂跡也」

4 この方便法身尊像は、そもそもは名古屋教区教化センター・旧蓮如上人研究班の調査過程で井川芳治氏によって偶然発見されたものである。ただ、『蓮如上人と尾張』には掲載されていない。本稿をまとめるにあたって井川氏より多くのご教示をいただいた。感謝申し上げます。

5 脊古真哉・吉田一彦・小島恵昭「総説 本願寺流真宗と方便法身尊像(同朋大学仏教文化研究所編『蓮如方便法身尊像の研究』二〇〇三年、法蔵館)。

6 吉田一彦「本願寺住持としての順如―再評価の試み」(註4前掲書)。また吉田氏は、実如上人によって順如上人は歴代から除外されたとしている。

7 註4前掲論文。

8 法名下付状は本願寺住持が法名を授与するときに発給される文書で、蓮如上人発給のものから現存している。ただ、その前の存如上人発給のものも有りうるという(註5前掲論文)。

9 よって浄福寺蔵の方便法身尊像は、名古屋教区内の順如上人下付と考えられる二幅目の方便法身尊像ということになる。

10 青木馨「墨書草書体六字名号について」(同朋大学仏教文化研究所編『蓮如名号の研究』一九九八年、法蔵館)。また、吉田一彦氏も註5前掲論文で同様のことを指摘している。

現代社会と
真宗教化

御遠忌と東日本大震災

― 行事部 東日本大震災班の歩み ―

御遠忌と東日本大震災

名古屋教区・名古屋別院 宗祖親鸞聖人
七百五十回御遠忌法要の計画を進める中、
行催事の中に東日本大震災を取り上げる
必要があるとの声があがり、行事部東日
本大震災班が発足した。

これまで教区内有志のボランティア団体
に所属し、教区教化センターにおいて現代
社会に顕在化した人間の問題について研究
してきた私もそこに加わった。しかし私個
人の御遠忌は、ただ静かに親鸞聖人の御前
に座り、これまでのことを見つめ直したい
ということだけであった。公の場において
震災を表現するというに積極的な理由
が見出せなかった。まかり間違えば、震災
やそれに苦しむ方々を利用するだけに終わ
りほしくないかという危惧もあった。

しかし現地へ行くたびに投げかけられ
る「伝えてほしい」「忘れないでほしい」
という声に頷く私がついて、また戸惑う私
がいる。何を伝えてほしいのか、何を忘
れないでほしいのか。その言葉の裏に隠
された、みなとともに救われていくよう
な世界の希求を、現地の方々自身もな
かな言葉にし得ないのだ。
周囲の願いと促しをご縁とし、その言
葉にならない葛藤を私だけでなく、集ま

った方々と共に、しかし私において問い
続けようと歩み始めた。

御遠忌テーマの確かめ

まず催事①（別記）において講師を担
当し、御遠忌テーマ「ともに生きる―い
のちのつながり―」を自明のものとしよ
うとする私自身を問い直した。それは私
にとつて、誰も排除することのない「同
朋」というあり方の模索であった。具体
的には、被災した当事者と被災していな
い私の立場とをどうしても分けてしま
う自身の意識の問題。その壁を越えるも
の何か。それを超えていこうとする意欲
があるとすればそれは何か。それを
参加者と共に問い直したいと願った。講
義に加え、炊き出し（一緒に食事を作り、
同じ鍋のご飯をいただく実体験）と座談
感話を通し、より深く確かめ合った。
具体的な動きとして震災に関わるこ
のなかつた行事部員の方々にも参加した
だき、声を聞かせてもらった。みなそれ
ぞれの問題や課題を背負っており、その
課題と御遠忌テーマがどのようにつなが
っていくのかを問い直していた。その姿
勢から、私の担う震災の課題を人間共通
の課題にまで掘り下げよと投げかけられ
ていると感じた。

あの時の私を思い出す

各々が各々の課題を生きているという
ことを確かめた上で、これまで教区教化
委員会都市教化部門にて行なわれてきた
「災害ネットワーク研修」とタイアップし、
もう一度各々が震災をふり返る場を企画
した。

現地研修前の事前学習会②では、新潟
中越地震をきっかけに災害支援に取り組
んでこられた酒井義一氏（東京教区存明
寺住職）から、氏にとつての三月十一日
の意味、支援活動を始めたきっかけ、現
在の活動や課題、震災が私たちに問いか
けていることなどをお話いただいた。そ
の後の座談では、それぞれがあの日あの
時感じたことや、社会ではどのようなこ
とが起こったのかを思い出し、語り合った。



別院本堂前にて炊きだし体験

「心」の正体は何
だったのか。そ
してその気持ち
と、ともすれば
忘れたと思う
私の葛藤をどう
整理すればいい
のかと、改めて
問われる場とな
った。

ともに現地に足を運ぶ

事前学習会②を踏まえ、仙台にある東
北別院を拠点にして福島、宮城、岩手
三県に赴いた（現地研修③）。参加者によ
つて現地入りの回数は異なる。今回初め



講師の酒井義一氏

て現地に入る
方も多かった。
しかし誰にと
つても、現地
はただ震災か
ら五年を前に
した現地であ
った。その大
地を踏み、空
気を吸い、そ
れぞれの思いを抱いた。
宗門が原発問題に向き合い続けるとい
う意思を示して設立した「真宗大谷派現
地災害救援本部 福島事務所」は原町別院
境内にある。そこを訪れる方々に語り続
ける木ノ下秀俊氏（仙台教務所非常勤嘱
託）からは、震災と原発事故の間近にい
て何を見て、何を感じ、何をされたのかと
いう生々しいお話を聞かせていただいた。
五年という月日の重さが、氏の静かで悲
しみを湛えた語り口に滲み出ていた。
原発事故により直接被害を受けた方々
の中にも、それぞれの事情があり、感情
がある。それを間近で受け止め続けてき
た氏の葛藤は
どれほどであ
つただろうか。
居住地や仕事、
補償金などの
境遇の違いを、
どうしたら互
いに尊重し分
かり合ってい
けるのか。私



原町別院（福島県南相馬市）

た氏の葛藤は
どれほどであ
つただろうか。
居住地や仕事、
補償金などの
境遇の違いを、
どうしたら互
いに尊重し分
かり合ってい
けるのか。私

が木ノ下氏の立場だったらどのような向き合うのだろうか。



正徳寺庫裏にて話を聞く

坊守の千葉寿子氏に案内してもらい、厨房で炊き出しを体験させてもらった。

共同生活で活躍した厨房の広さと器具の多さに驚かされつつ、自坊の現状と照らし合わせて何ができて、何が足りないのかについて考えさせられた。

その後、非日常であるお寺での共同生活の中での様々な出来事を話していたとき、誰もが依り処を求め、人と関わり、尊厳を回復したいという願いを持っていることや、お寺がそういう世界をひらく場として求められているということを伝えていただいた。

参加者からは「百聞は一見にしかず、復



南三陸町防災庁舎にて

お寺に避難してきた近隣住民に庫裏を開放した正徳寺では、およそ五ヶ月にわたって百五十人からの避難者と共同生活を

興は始まったばかり」「震災の悲劇や今の現実を受け止めて暮らす方々がそこにいた」「今、私に何ができるのかと突きつけられた」「体験や知識を共有しなければならぬ」「ガイガーカウンターの音が耳から離れない」「地域の中でのお寺の役割を考えさせられた」「見聞きしたことを伝えたい」「私たちは未来に何を残していけるのか」「被災された方は特別ではない」「無念だったろ

う」「名古屋でもいつ何が起るかわからない」「などの声がかかれた。短い研修であったが、現地にともに身を置き、各々に去来した思いを語り合い、聞き合うことで、抱え込んでいた苦しみを分け合っていたような、温かな感覚を覚えた。ここに私のあり方や責任を問い直していただく同朋会があった。他者と関わり、言葉にならない苦悩をわかちあつていくことから、ひらかれていくことがあると教えられた。



仮設住宅にて一緒に念珠づくり

震災をあらゆる人間の課題として共有するために

東日本大震災を立ち上げ、これまで催事を開催してきて浮かび上がってきた課題や問いが多くある。「被災者」や「当事者」とは具体的に「誰を指すのか。また苦悩という点を基準にすれば、いわゆ

る「当事者」になりきれないという苦しみもある。なぜその線は引かれるのか。またその線はいつどこで引かれたのか。誰が引いたのか。震災直後、世界中を動かしたあの「気持ち」は何なのか。「絆」とは何なのか。大切な人や故郷を失った方々は、何に苦しみ、何を求めているのか。「死」とは何か。「死者」とは何か。「ともに生きる」とは何か。「いのち」とは何か。「私」とは何か。

これらの問いや課題を整理、再確認すべく、震災から丸五年となる二〇一六年三月十一日には、現地研修③の参加者や震災に関わる諸団体の方々と共に、「3・11勿忘のつどい」④を開催し、いろいろな立場からの東日本大震災を語り合い、五年間の「私」の歩みをふり返った。そして御遠忌本番中の四月二十六日には、「シンポジウム東日本大震災から問われる私」⑤を企画している。阪神淡路大震災の体験から仏教へと歩み寄せられた作家の高村薫氏をお招きして「生かされた者として想う」という講題のもと基調講演をいただき、その後、玉光順正氏（山陽教区光明寺住職）との対談を通して、真宗の教えに照らし課題を深めたい。

このシンポジウムはこれまでの集大成であり、また今後への出発点となる。判断としないまま胸に残り続ける葛藤を、誰もが共有できる問題として少しでも言葉に表現し、全ての人にとっての同朋会となればと願っている。

(研究員 大河内真慈)

◆行事部東日本大震災の歩み

①行事部全員大集合！ともに生きる？いのちのつながり？
日時：二〇一五年五月二十日(水)～二十一日(木)

場所：別院本堂下広間、本堂前
対象：御遠忌行事部員
内容：講義、炊き出し体験、座談会、動行
参加人数：五十名

②東日本大震災現地研修 事前学習会
日時：二〇一六年一月十四日(木)午後三時～
場所：事務所議事堂
講師：酒井義一氏(存明寺住職)
講題：私にとって東日本大震災とは
内容：講義、座談会
参加人数：三十四名

③東日本大震災現地研修
日程：二〇一六年二月四日(木)～五日(金)の二泊三日の二つのコース
日(出)を加えた二泊三日の二つのコース
場所：東北別院、南三陸町防災庁舎、関上地区(以上宮城県)、原町別院、福島事務所、小高地区(以上福島県)、陸前高田市正徳寺、本釋寺(以上岩手県)
内容：視察、聴聞、炊き出し、念珠作り、早茶、カラーパ
ンド作り、歌ほか
参加人数：三十八名

④3・11勿忘のつどい
日程：二〇一六年三月十一日(金)午後二時三〇分～
場所：別院本堂、別院鐘樓、教務所議事堂、各部屋
内容：勿忘の鐘、追甲法要、震災関連の各団体の発表、語り合い、寄せ書き作成
共催：でらボラNAGAYA(真宗大谷派名古屋教区内有志災害ボランティアネットワーク)

⑤シンポジウム

東日本大震災から問われる私

期日：二〇一六年四月二十六日(火)

会場：東別院ホール

日程：午後五時三〇分 開場

午後六時 開演

午後六時十五分 基調講演 高村薫氏

「生かされた者として想う」

午後七時三〇分 対談

高村薫氏×玉光順正氏

司会：大河内真慈



高村 薫氏

玉光 順正氏

TEL 〇五二一三三一一九五七八
午後八時三〇分 終演
※参加費無料 要整理券
問合せ：御遠忌行事部

親鸞聖人と尾張門徒

—その信仰のすがた—

日時：4月22日(金)～5月1日(日) 10:00～17:00

※27日は16時まで、5月1日は15時まで

会場：名古屋教務所 1階 議事堂

●ギャラリートーク (各30分) 参加無料

今回の展示に関して調査・研究・解説の執筆にあたったスタッフが展示物の説明をいたします。

■4月22日(金) 10時～ 安藤 弥
(同朋大学准教授)

■4月26日(火) 16時～ 小島 智
(教化センター研究員)

■4月30日(土) 12時30分～ 井川 芳治
(第1組敬圓寺衆徒)

会場：名古屋教務所 1階 議事堂

●座談会 (講義と座談) 参加無料 ※要事前申し込み

■4月27日(水) 16～19時 (受付15時30分より)

会場：名古屋別院 本堂下広間

図録進呈 (定員30名)

※事前に展示会をご観覧いただき、ご参加ください。



蓮如上人展(2000年)で解説する井川氏

お問い合わせ・お申し込み

御遠忌事務局「行事部」(名古屋別院 教化事業部)

T E L 052-331-9578 F A X 052-331-9579

INFORMATION

教化センター日報

■2015年12月～2016年2月

12月3日 研究業務「平和展」学習会
4日 研究業務「自死者追悼法要 いのちの日のいのちの時間」後援
10日 研究生・実習「真宗門徒講座(書いて味わう「正信偈」⑧)」
1月7日 教化センター報恩講
12日 研究業務「平和展」学習会
18～30日 2015年度 教化センター図書整理
19日 研究生・教化研修「2015年度 伝道スタッフ養成講座③」

21日 教化研修「聖典研修⑬」(廣瀬惺氏)
26日 教務所・教化センター合同報恩講
28日 研究業務「平和展」学習会
29日 研究生・実習「真宗門徒講座(書いて味わう「正信偈」⑨)」
2月1日 研究生・実習「名古屋別院 晨朝法話」
～4日
3日 研究業務「平和展」学習会
12日 研究生・教化研修「2015年度 伝道スタッフ養成講座④」
16日 研究生・実習「真宗門徒講座(書いて味わう「正信偈」⑩)」
19日 教化研修「聖典研修⑭」(竹橋太氏)
29日 研究業務 自死遺族わかちあいの会「いっぶく処」後援

公開講座のご案内

◆聖典研修『仏説阿弥陀経』—その教義と真宗の儀式—

日時：第8回 6月16日(木) 午後6時～8時30分

講師：廣瀬 惺氏 (同朋大学特任教授)

会場：名古屋教務所 1階 議事堂

持ち物：『真宗聖典』

聴講料：500円

※教師陸補のための聴講証発行研修

《編集子雑感》

名古屋教区・名古屋別院 宗祖親鸞聖人750回御遠忌法要まで、残すところ1ヶ月。今号で報告した教化センターが関わる行催事を含め、当日に向けての準備が大詰めの段階を迎え、各々の関係者が連日のように慌ただしく動いている。

しかし、どれだけ準備を尽くしても不安がなくなることはない。何かやり残したことはないか、当日はどのような不測の事態が起こるのか…と考え始めると、ソワソワ

て落ち着かなくなる。その一方で、ここまできたのだから、あとは腹を括って当日を迎えるだけだ…という思いも、わずかながら芽生えつつある。どうやら私は、期待と不安が入り混じった今の状態のまま、この度の御遠忌を迎えることになりそうだ。

清澤満之師の「天命に安んじて人事を尽くす」という言葉を思い出す。御遠忌を機に、この言葉ともう一度向き合っていきたい。

(て)

お知らせ

●御遠忌期間中の教化センターについて
・御遠忌期間中(4月22日～5月1日)は、休館させていただきます。

●臨時休館について
・4月8日(金)、4月9日(土)、5月6日(金)は臨時休館させていただきます。

■教化センター

〈開館〉月～金曜日 10:00～21:00
土曜日 10:00～13:00
(日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)

〈貸し出し〉書籍・2週間、視聴覚・1週間
～お気軽にご来館ください～

■名古屋別院・名古屋教区・教化センターホームページ【お東ネット】<http://www.ohigashi.net>

■お東ネット内で、教化センター所蔵図書・視聴覚教材を検索できます。

お東ネット

検索